

「交われ！セカイ」

明島 あさこ

登場人物

アリス (権田有子) (18) 大学1年生

ロージー (鮫島次郎) (18) アリスの友人

大政善治 (18) アリスのクラスメイト

宮本 (18)

佐々木 (18)

りな (18)

あみ (18)

河津 (20)

男子A

男子B

不審者

駅員

女子高生

サラリーマン風の男

○路地裏（夜）

明かりがない。
荒い息遣い。走っている。
強めの縦巻きパーマが揺れる。

○大学・大講義室

多くの学生が授業を受けている。
その後方。大きなリボンのついた黒髪
ツインテール。毛先は強めの縦巻きパ
ーマ。

○別の路地裏（夜）

走る足元は汚れたスニーカー。迫るよ
うな重たい息遣いが伴う。
一方、焦る浅い息遣いには、不規則に
乱れるヒールの足音が混じる。
シルエットは、厚いヒールの靴。

○大学・大講義室

机の下、ふらふら揺れる厚いヒールの

ストラップシューズ。白いレースの靴
下を合わせている。

アリスM「今どき、秋葉原でも見かけないん
じゃない？」

○狭い路地（夜）

植木の陰から細い腕を引く、男の手。

アリス「ひゃあっ！」

ほんの少しの月明り。

ふわふわと裾の揺れるワンピース。そ
の華奢な肩を引き寄せるのは、チエツ
ク柄シャツの腕。

○大学・大講義室

ロリータ系ワンピースの裾がふわりと
揺れる。

アリスM「私じゃないわ、あなたよ」

最前列で授業を受ける男子学生は寝ぐ
せ頭。そしてチェック柄シャツ。

○狭い路地（夜）

大政の声「（少し裏返って）け、けいさつの
ひとお、ここですう！」

不審者「（舌打ち）」

走り去る足音。

チェック柄シャツに抱きとめられてい
るツインテールのアリス（18）。

○大学・大講義室

頬杖について寝ぐせ男子を見ている、
ゴスロリアクションのアリス。

アリスM「大政善治」

○狭い細い道（夜）

寝ぐせ頭の大政善治（18）、アリスの
顔をのぞき込んで、

大政「だい、じよ、ぶ、ですか」

○大学・大講義室

寝ぐせ男子・大政。眼鏡をくつとあげ

て、ノートを取る。

○細い路地（夜）

驚いた顔で大政を見るアリス。

大政「あ、あ、うわあああ！」

と、アリスから手を放し、

大政「ごめんさない！ すみません！ あの、あの」

アリス「いえ、ありがとう、ございました」

軽く頭を下げ、その場を去ろうとする。

大政「警察！」

振り返るアリス。

大政「さっきのは、嘘、だけど、行かなくて大丈夫……ですか？」

アリス「いえ、何もなかったし、それに」

大政「？」

アリス「たぶん、怒られるだけ。こんなかつこ、こんな時間」

大政「権田さんは悪くない！」

アリス「へ？」

大政「服装や時間帯は理由にならない！」

アリス「いや、名前」

大政「権田さんですよ？ 同じ学科の、権

田有子さん」

アリス「……！！」

と、逃げるように去る。

大政「え！？」

○大学・大講義室

頭を垂れるアリス。

アリスM「そりゃ、こんなかつこしてたら覚えてるかあ……」

ロージーの声「……ス」

アリスのノートをつつくペン。虹色の本体にオーロラ色の羽がついている。

アリス「（ため息）」

ロージーの声「（小声で）ア、リ、ス」

気づいていないアリス。

アリスのノートをつつくのは、ロージー（18）。緑のメッシュヘアにカラフ

ルなパーカー。

ロージー「（低い声で）おい権田」

アリス、睨みを効かせた顔を上げ、

アリス「その名で呼ぶな」

ロージー「やあん、こわあい」

アリス、ロージーを睨んで大政に視線

を移す。

ロージー「なあに？ 誰見ちゃってんの？」

アリス「押し」

ロージー「押し？」

アリス「うん。まだ誰も気づいていない原石」

ロージー「やだ、そんなイケメンいた？」

アリス「人は見た目じゃないわ」

ロージー、アリスの服装を上から下ま

で見て、

ロージー「そうね」

アリス「あの方は、もっと多くの人にその魅力を知られるべきだわ。そして、たくさんのお愛に満たされるべき人。あの優しさはまた新たな優しさと呼び、世界を平和にする」

ロージー「新しい宗教かしら」

アリス「アリス、人生初の推し活始めます」

○タイトル「交われ！セカイ」

○大学・大講義室

教員、部屋を出ていく。

学生たち、次々と立ちあがる。

ノート類を片付けるアリスとロージー。

宮本「あの一」

顔を上げるロージー。

スマホを手にした宮本（18）、佐々木

（18）。

宮本「鮫島、くん」

ロージー「やあん、ロージーって呼んで」

と、ウインク。

宮本「……あ、あの、クラスの飲み会の、出
欠……」

ロージー「やだあごめん、忘れてた。（ア
リスに向いて）どうする？」

首を横に振るアリス。

ロージー「(宮本へ)ごめん、うちら欠席
でえ。お誘いありがとねえ」

宮本「いや、いいよ、サンキュー」

と、アリスらに背を向ける。

佐々木「あと誰？」

宮本「大政」

その名前に、はっと反応するアリス。

佐々木「あいつもういねえわ。いっつも早い
な」

宮本「何してんだろな」

佐々木「どっかで勉強とかじゃん」

宮本「あーありえる」

アリス、真顔でプリントを整えながら、
アリスM「いいじゃない。学生だもの。勉強
最高！」

宮本たち、去りながら、

宮本「連絡先わかんねー」

佐々木「それなー」

ロージー「あら、誰も連絡先分からないのか

しら。アリス、聞いてきてあげたら？」

アリス「私！？」

ロージー「押し活。大政くんの魅力、みんなに伝えるんでしょ？」

アリス「私、推しの名前言ったっけ……」

ロージー「やあね。わっかややすい反応しておいて」

アリス「嘘！ どのへんが」

ロージー「アリスに青春かあ」

アリス「押し活だってば」

ロージー「ときめいてるのは同じでしょ」

アリス「……。勇気とか優しさとか、子どもの描くヒーロー像みたいな、鼻で笑っちゃうようなものは、必要なの、この世界に。誰もが持つてる必要はないけど、あるなら大切にしたい。それだけ」

ロージー「要はかっこいいってことね」

アリス「押し活って何したらいいんだろう」

○歩道橋付近

大きな荷物を抱えた高齢の女性、階段を上がっている。

そこへ大政。女性に何か話しかけ、荷物を預かり、ゆつくりと一緒に階段を上がっていく。

その様子を、アリス、近くの電信柱の陰からスマホで撮ろうとしている。

背後からロージー、ひよっと現れ、

ロージー「犯罪」

アリス「ひやあっ！ いきなり声かけないで」

ロージー「声ってのはいきなりかけるものでしょ。てかそれ、盗撮よ」

アリス「推し活といえ、写真、SNS、炎上でしよう？」

ロージー「推し活を一度検索して？」

アリス「悪いことには使わないよ」

ロージー「だとしても。よく分かってるくせに」

アリス「……（頷く）でも大政くんのすばらしさを世界中に伝えたい」

ロージ「世界は最終目標にしましょ。まずは身近な、とりあえずクラスの人に紹介したら？」

アリス「きらきら大学生とどうやって話したらいいか分かんないし」

ロージ「じゃあ、授業関連とかは？ 自然な感じで」

考え込むアリス。

○大学・ラウンジ（日替わり）

ブラックアウトしたパソコンを前に頭を抱える佐々木。それを囲む宮本、男

子A、男子B。

佐々木「実験データ消えてもうたあ！」

宮本「はあ？ 記録係おまえだろ！？」

佐々木「（パソコンをなでながら）これ、ちよつとぶつけて」

男子A「ちよつとじゃないね、絶対」

宮本「バックアップは？」

佐々木「忘れてた……」

男子B 「手書きしたのもう捨てちゃったな」

男子A 「課題どうしよう」

ラウンジに入ってくる大政。宮本を見

つけ、歩いてくる。

大政 「あの」

大政に注目する男子4人。

大政 「おとといの、化学演習1の授業」

宮本 「今、まさにまとめようとして、みごとにデータ消えたところ」

大政 「僕、全グループのデータ持ってる」

宮本 「へーよかったね…：ね！？」

大政 「他のグループがどうだったか、比べたくて、これ」

と、レポート用紙を差し出す。

いくつもの表が書かれている。

佐々木 「え、神ですか？」

男子A 「すっげー！ 俺たちのグループもあるじゃん！」

男子B 「よかったー！」

大政 「あのさ、なんか」

と、ポケットからちぎれたルーズリーフを出し、広げる。

が、4人はデータに夢中で大政を見ていない。

× × ×

ソファの陰。

様子を見ているアリスとロージー。アリスはあんぱんとパックの牛乳を持っている。

ロージー「あんた、推し活の何を検索したの？」

× × ×

大政「あ」

と、ルーズリーフが手から離れ、ロージーの近くに落ちる。

そこには利き手以外で書いたような文字で『化学演習1の実験データを持ってラウンジへ来い』

ロージー「思ってたんと違う！」

大政、ルーズリーフを拾おうとする。

逃げるように隠れ直すアリスとロージ
ー。

大政、ルーズリーフを拾い上げ、宮本
たちのところへ戻る。

× × ×

宮本「ありがとな！」

佐々木「なんか想像通り真面目だな！」

大政「あ、うん」

× × ×

ソファの陰。

ロージ「もしかして、パソコンもあんたが

……」

アリス、牛乳のストローをぎりぎりと
噛んで、

アリス「想像通りってなんなのよ！」

○駅前・自転車置き場（日替わり）

倒れた自転車をひとつずつ起こす大政。

陰から双眼鏡で見ているアリス。

アリス「おお」

大政、空き缶を拾うと、ポケットからビニール袋を出して入れる。

アリス「……！」

○大学・中庭（日替わり）

鳥が死んでいる。

気味悪そうに避けて通る学生たち。

大政、リュックのポケットからビニール袋を出し、手にはめて鳥を抱える。

鳥を木の根元へ。

枯葉をかけ、拝む。

他の木の陰から見ているアリス。

アリス「はぁあっ」

○道路（日替わり）

煙の上がるポイ捨てタバコ。

大政、まっすぐに歩いていきマイボトルの水で消火。

リュックのポケットからビニール袋を取り出し、タバコを入れる。

電柱の陰にアリス。

アリス「ふわああああ！」

○大学・食堂（日替わり）

アリス、ざくつとサラダにフォークを
刺して、

アリス「もどかしいわ」

アリスの向かいのロージー、カレーを
一口。

ロージー「良い行いってのはね、見てる人は
ちゃんと見てるの。やだこれ、思ったより辛
いわ」

アリス「でもなあ、もつとどーんと、ばーん
と、うわって感じで」

河津「（遠くから）ああ？ オレが悪いって
言いてえの？」

アリスとロージー、声の方へ顔を向け
る。

× × ×

少し離れた席で、金髪で大柄な河津

(20)、宮本、佐々木に絡んでいる。

× × ×

アリスとロージの席。

ロージー「あれ、うちのクラスの子たちじゃない」

アリス「そうだったけ？」

× × ×

佐々木「もうやめようぜ」

宮本「でも、これ、シミになって……」

宮本の抱えるリュックにはコーヒのシミが大きくついている。

河津「そんなとこ置いてる方が悪いんだろうよ」

宮本「普通に椅子に置いてただけで……」

河津「じゃあ何？ もうコーヒー飲むなってこと？」

宮本「そういうことが言いたいわけじゃ」

河津、宮本、佐々木の周りから人がいなくなっていく。

× × ×

ロージー「やだわあ、話の通じない人って」

野次馬学生たちを見ているアリス。

アリス「（はっとする）」

× × ×

河津「ではあなたのおっしやる通り、わたくしは二度とコーヒーを飲みません。持って歩いたりもしません。これでよろしいですか？」

× × ×

立ちあがるアリス。

ロージー「え、なに？」

× × ×

宮本「俺は、そんなことまでは……」

河津「なんですー？ 聞こえませんが？」

× × ×

アリス、椅子の陰にしゃがみ、床に日傘を滑らせる。

× × ×

河津「おい？」

次の瞬間、河津の頭から水か滴る。

宮本「え！？」

河津「……」

転がるプラスチックのコップ。

河津の後ろ、ひざと手を床についている大政。

大政「へ？」

その足元、しゅっと引っ込む日傘。

河津「はあ？」

息をのむ周囲。

ロージー「あらあ！ 大変！」

と、タオルを持って大政のもとへ駆けつけ、

ロージー「これから水は飲まない方がいいわあ、に・ど・と。持って歩くのもやめましょーう！」

河津「……っ！」

宮本「そ、そうだよ。そういうことだよな」

佐々木「（河津の顔を窺いつつ）こ、こんなことにならないためにもなあ」

河津「（舌打ち）」

濡れた髪をぬぐいながら去る。

しばしの静寂。

佐々木「助かったあ！！」

ほっとする食堂内。

佐々木「おまえ全然引かねえからあ！」

宮本「なんかタイミングとか言葉とか分かんなくなつて」

大政、自分の手を拭いていたロージー
がいないことに気づき、

大政「あれ？」

× × ×

食堂の隅。

タオルを畳むロージーと日傘を握るア
リス。

ロージー「やめなさいよ、突然。アタシい
なかつたらどうするつもりだったのよ」

アリス「ロージーいたじゃん」

ロージー「まったくこの子は」

× × ×

転がるコップを拾う大政。

佐々木「大政っ、マジで助かった！」

大政「いや僕は何も」

と、ポケットからハンカチを取り出す。

宮本「いいよ、片付けなんか俺やるから」

大政「いやでも。それより」

宮本「？」

大政「その、リュック……」

宮本、抱えていたシミ付きのリュックを見て、

宮本「あー悔しいけどさ、もっとやべーことになるなかつただけでしたよ」

× × ×

アリスの前を横切る女子数名。

りな「ホント怖かったあ。うちら動けなかつたもんね」

あみ「大政くんやるねえ」

アリス、顔が輝き始める。

アリスM「そうです、そうなんです！ みんなよく見て！ あの穢れなき瞳を！」

× × ×

ティッシュで床を拭く宮本。

そこへゴミ袋としてビニール袋を差し

出す大政。

× × ×

りな「めっちゃ陰キャだと思ってたけど、意外と話せそうだね」

アリス、スキップで自分の席へ戻る。

ロージー「（軽くため息）」

アリスの後を追う。

カシャッと小さなシャッター音。

スマホをこっそり構える人の後ろ姿。

○同・講義室（日替わり）

最前列に座る大政。その周りを囲む、りな、あみ、女子数名。ノートを広げ何か聞いている。

大きく表情を変えず受け答えする大政。明るく笑う女子たち。

後方の席から見ているアリスとロージー。

ロージー「あれでいいわけ？」

アリス「あれでいいでしょ」

ロージ「あんたはさ、助けてくれた王子様に恋してたんじゃないの？」

アリス「大政くんは推しだよ」

ロージ「だとしても。あんなに女の子に人気が出ちゃったら、いよいよアリスのことなんか見てくれないじゃない」

アリス「推しってそういうものじゃないの？」

ロージ「（ため息）」

アリス「それに……私みたいな見た目メンヘラ地雷系ヤバめ個性派が推してるって、大政くんにとってはマイナスでしょ」

ロージ「それは肯定も否定しないわ。アタシたちそういう運命」

りなの声「ねえ大政くんって好きな子いないの？」

はっとするロージ。

何かを考えている大政。

アリス「下世話」

と、イヤホンを耳につける。

ロージー「（小声）いいじゃない、恋くらい」

○同・ラウンジ（日替わり）

大政を囲む、宮本、佐々木、りな、あみ。

大政、センターパートのヘアレンジが
されている。眼鏡も外してかっこよく
イメチェン。

りな「じゃーん！」

宮本「いい感じじゃん！」

あみ「お兄ちゃんの友だちの美容師さんが、
カットモデル探しててさ」

× × ×

離れた席から見るアリスとロージー。

ロージー「あらまあ、BTSの方かしら」

アリス「内からにじみ出る品の良さで何をし
ても似合うのよ」

× × ×

あみ「お店の動画もバズってるんだよ！」

ちよこちよこ前髪を触る大政。

佐々木「だって、すごいいい方のイメチェンだもん」

× × ×

ロージ「推しがちらちらするのはいいの？」

アリス「学業に支障がなければおしやれしたっていいでしょ、大学生なんだから」

ロージ「外見については、アタシたちがどうこう言うことじゃないわね」

× × ×

りな「いけるよ！」

宮本「いこう！」

立ちあがる大政。

そのまままっすぐアリスのもとへ。

ようだが、視野がぼやけているのか、

ぶっかりつつ。

ロージ「……！？」

カフェラテを飲んでいるアリス。

ロージ「ちょ、ちょ、アリス！」

アリス「んあ？」

と顔を上げる。

目の前に大政。

アリス「！？」

大政「権田有子さん、好きです」

ロージー、口を押えて震える。

アリス、口をぼかんとあけている。

大政「あの、よかったら、僕と、付き合ってくださいませんか」

遠くから微笑ましく見ている宮本たち。

アリス「……う」

ロージー「アリスっ！」

と、嬉しそうにアリスの腕をゆする。

アリス、がたんと立ち上がって、

アリス「違う！！」

と、鞆を掴み、走ってラウンジを出ていく。

宮本「え……？」

啞然とする宮本たち。

ロージー、逃げるアリスと大政の表情、

どちらも気にしながら、

ロージー「ちょ、ちょっとアリス！」

と、アリスを追いかける。

大政、窓越しに走り去るアリスを見て、

大政「……（はっと何かに気づく）」

○同・屋外

早足で歩くアリス。

ロージー「待ちなさいよ！ 何、違うって」

アリス「違う、そんなの違う！」

ロージー「ちよっと！」

アリス、立ち止まって振り返り、

アリス「あなたはアイドルを推していますも

うすぐCDデビューです武道館ライブです

『その夢諦めて君と付き合いたい』はいあな

たはうれしいですか？」

ロージー「はあ？」

アリス「大政くんが私を好きな世界線？ そ

んなものは存在いたしません。こんなロリー

タ女好きなやつは大政くんじゃありません」

ロージー「あんた、何言ってるの？」

アリス「そんなの、私が推してる大政くんじやないって言うてんのよ！」

ロージー「なにその決めつけ。大政くんはどんな見た目だって、何が好きだって、大政くんでしょ！？」

アリス「でも私なんかのことが好き、それだけ違う！！　そんなの許さない！」

と、背を向け去る。

ロージー「なんなのよ意味不明サイテー自己中女！　タンスの角に小指ぶつけちゃえー！！！」

早足で去るアリス。

○同・講義室（日替わり）

最前列で授業を受ける大政。前髪には寝ぐせ。眼鏡をかけている。

真ん中あたりに座っている宮本、佐々木、りな、あみ。大政の様子を見て顔を合わせる。

ひそひそとした声で、

あみ「なんか悪いことしちゃったかなあ」

宮本「いや、絶対大丈夫って言ったの俺だわ」
りな「それなら私も言った」

佐々木「でもさ、違うってどういう意味だろ
うね」

宮本「それな」

教室後方、窓際に座るアリス。黙々と
ノートを取っている。

教室後方ドア付近にロージー。アリス
をちらりと見て、ふんつと怒った顔。
ノートに向かう。

× × ×

続々と講義室を出ていく学生たち。
急ぎ立ち上がり、後方の席を確認する
大政。

アリス、ロージーの後ろを素通りしよ
うとする。

ロージー「あんたのそれ、無敵の戦闘服だと
思ってた」

立ち止まるアリス。

ロージ―、振り返らずに、

ロージ―「自分らしく生きる、あんたらしさを全開に出せる、好きなものを好きって言える、理想の服装なんだと思ってた」

アリス「……」

ロージ―「それが何。私じゃダメって。確かにアタシたちはメジャーなタイプじゃないわよ。でもその服は、アタシたちの足を引っ張るためのものなの？　生きづらくするためのものなの？」

アリス「……」

ロージ―「そんなの、鎧じゃん。仮面じゃん。あんたは、鎧を脱いで無防備になるのが、何でもない自分を見られるのが怖いだけじゃない？」

アリス「鎧で、何が悪い」

ロージ―を見ずに去る。

アリスの足音が遠ざかり、ロージ―も立ち上がる。

ふと顔を上げると、まごついている大

政。

○同・廊下

足早に進むアリス。

アリス「好きって何」

徐々にスピードを落としながら、フリルのついたスカートの裾をなぞる。

すれ違う女子学生とぶつかる。

学生「あ、ごめんなさい」

よろけるアリス。しゃがみこんで、

アリス「気持ち悪い」

学生「え、大丈夫ですか！？」

おろおろする学生。

アリス、しゃがんだまま動けなくなる。

スカートの裾をぐしゃぐしゃに握りながら。

○同・講義室

部屋の端に並んで座るロージーと大政。
他には誰もいない。

大政「悪いことをしたと、思っている」

ロージー「やだあ、大政くんの気にすることじゃないわよお。もうホント自分の目線からしか世界が見えてないのよ、あの子は」

大政「そういうものだよ、世界は」

ロージー「あら」

大政「自分以外の目で、世界がどう見えているかなんか分からない。だから、知りたいと思うのだけれど。でも僕は、彼女との世界の交わり方を間違えたのかもしれない」

ロージー「そお？ とつてもありきたりな：じやなくて、シンプルで伝わりやすい告白だったと思うけど。それに、アリスを助けた王子様なんだし」

大政「それは、偶然。でも、同じ学科で同じ授業を受けるその前から、僕は彼女を知っている」

ロージー「出身同じだったっけ？」

大政「僕こそ助けられた身だから」

ロージー「あら……」

○（回想）駅のホーム。

高校の制服の大政、多くの人に押されるように電車から降りる。手には参考書とお守り。

高校生・大政「絶対大丈夫絶対大丈夫」

後方でざわつく声。

何人もの人が振り返りながらも、我関せずと改札へ向かう。

流されるように振り向く大政。

人が避けている空間に、駅員、サラリ
ーマン風の男、泣いている女子高生、
そして高校生・アリス。制服ですつぴ
ん。

大政の声「すぐに分かった。痴漢を捕まえたんだろうって」

駅員に訴えかける高校生・アリス。

大政の声「大きな駅ならよくあることなのか
なって他人事で。駅員さんもいるし、犯人も
分かっているみたいだし。僕は受験会場に行

くことに必死で、もうすぐにそのことは忘れて」

改札へ急ぐ、高校生・大政。

○（現在）大学・講義室

大政「そのときは、まさか同じ受験生だと思わなかった」

ロージー「思わないわよ、普通。そんな状況でも意志を貫けるのはさすがアリスって感じねえ。ん？でも大政くんが痴漢にあったわけじゃないのよね？アリスは何を助けたの？」

大政「僕はもう一度、彼女と会うことになる。ひとつめの試験が終わったあとに」

○（回想）試験会場の大学校舎

トイレから出てくる高校生・大政。

同じタイミングで女子トイレから出てくる高校生・アリス。黒く長い髪が揺れる。

大政の声「すぐに気づいた」

高校生・大政「え……」

高校生・アリス、廊下の角を曲がり、

高校生・大政の視界から消える。

大政の声「僕は自分が恥ずかしかった」

○（現在）大学・講義室

ロージー「恥じることなんかどこにもないわ。

大政くんには直接関係ないもの。それに、アリスもそこにいたってことは無事に受験会場に着いたってことでしょ。気にせず試験受けていいのよ。どうせその電車、大した仕事もしてない大人がいっぱい乗ってたんだから、そいつらが助けたらよかったってだけ。待って、ますます分かんない。どこでどうやってアリスが大政くんと接するワケ？」

大政「僕はすごく恥ずかしくて、すごく落ちこんで、すごく勇気ももらった。何もできない大人にはなりたくない。そのために、たくさんの人に会いたい、いろんな世界を知りたい」

いって、そう思ったら次の試験はびっくりするくらいリラックスできて」

ロージー「まさか、それを助けられたっていうの！？ アンミカさんもびっくりのポジティブ」

大政「いつかどこかで彼女に会えたら、そのときはもう少し胸を張っていられる人になっていたと思うていた。だから、入学式で見かけたときはびっくりしたよ」

○（回想）大学キャンパス内

桜が咲いている。

スーツ姿の学生の中、ゴスロリを着ているアリス。

それを見かけるスーツの大政。

大政の声「まさか、同じ化学専攻だったなんて」

ロージーの声「え、そこ？」

○（現在）大学・講義室

大政「なんか、勝手に文学少女かと……」

ロージ「あいつ、漫画しか読まないわよ」

大政「でもそれ以上に嬉しかった。ちゃんと試験に合格できていて。時間の融通が利いたとしても、平常心で受けられるとは限らない。第一志望だったかは分からないけど、それでも、大学生になれた彼女が見られて本当に良かったと思った。彼女みたいな人こそ、多くの学びを受け、世の中に出ていくべきなんだ」

ロージ「あんたたち、どっちもどっちね。でもまさか、王子が先にアリスを見つけてくれてるとはねえ。そら、目立つものねえ」

大政「目立つ？ 誰が？」

ロージ「待って。本当に見えている世界が違うのかしら」

大政「髪がきれいだから？」

ロージ「そこは見えてるのね」

大政「服装のこと？ 僕、女の子の服の違いとかよく分からなくて」

ロージ「最高だわ」

大政「スカートだなあとはい思うんだけど」

ロージー「全然間違っていないわよ」

大政「彼女は、こだわりのある服を着ているのかな。さつきも戦闘服って……」

ロージー「最初に言っておくわ。本当に戦う服ではないの。この派手パーカーもそうだけど、アリスもアタシも、好きな服着てたらしいができる」

大政「息……？」

ロージー「別に誰よりも目立ちたいとかではないの。ただ、アタシでいたいだけなの」

大政「鮫島くんもこだわ」

ロージー「ロージー」

大政「……ロージーくんもこだわりがあるのか。確かに僕の家ダンスにはない色だ」

ロージー「大政くんがダンスっていうと、ホントに木のダンスがあるんだろうなって思えるわ」

大政「他にダンスある？」

ロージー「今度、うちに来てぜひ」

大政「僕は服なんてなんでもいいと思って生きてきちゃったな。裸でなければいいのかなって」

ロージー「一番大切なことね。アタシはー、なんだろ。こうやってたくさんたくさん色を集めることで、自分の色を消せるような気がしてるのかも。逆効果かもしれないけど。ってことはアタシも守ってるだけかー」

大政「遠くからでも見つけやすそうだし、とてもいいと思うけどな。ほら、初詣のときとか」

ロージー「ありがとう。来年もがんばる」

大政「僕は、人が同じに見えたことはない」
ロージー「うーんと、服装以外の部分か？」

大政「似たような流行りの服とか、決められた全く同じ制服を着ていても、ひとりひとりが全然違う生き物だから個性はあふれている。それはみんな同じ。ロージークンも、君のいところはたくさん出ているはずだから、服はただ楽しむためのもの……って僕が言うこ

とじゃないか」

ロージー「突然の核心。やっぱ、あなたは推されるべき人だわ」

大政「好き嫌いはそれぞれにあっていいけど、ただ、他人の服装を自分の行いの理由にするのだけは、違う」

ロージー「……ん？ なんの話？」

大政「そんな汚い理由で、人から楽しみを奪っていいわけがないし、人に罪悪感を抱かせてもいいわけがない。戦闘服とか鎧とか、本人がどう思ってもいいけど、それを理由に傷つけていいわけないんだ」

ロージー「……」

○同・廊下

壁に手をついて立ち上がるアリス。

アリスに近づく人影。

振り向くアリス。

目前に迫る影。手にはスマホ。

○同・講義室

ロージー「それは、どういう」

大政「僕が、彼女と話をしたきっかけは、聞いたんだよね？」

ロージー「ああ、夜道のね。誰かに追いかけられたっていう」

大政「彼女、あれが初めてじゃないんじゃない？」

ロージー「え……あーうん、ある。駅で盗撮されたりとか、なんか、いろいろ」

大政「気持ち悪いよね」

ロージー「そりやそうよ。にたにた笑ってるおやじとか、中にはズボンに手突っ込んでるやつもいたわよ。あー思い出しても気持ち悪いっ」

○校舎の隅

河津「あのさ、あれ、おまえがやったんだろ？ あんときいたっしょ？」

手にはスマホ。

○大学・講義室

大政「そんなもんは愛じゃないよ。でも、広い意味で好意、好き、ともいえる」

○校舎のどこか

アリス「（怯えて）……」

○大学・講義室

大政「好きだから。好きになっちゃうような格好しているから。スカートだから。脚出してるから。理由になるわけない」

○校舎の隅

河津「サークルの仲間が写真撮ってんだわ。見る？ 証拠」

○大学・講義室

大政「でも……いや、だからこそ僕の告白は間違っていた。彼女にとって『好き』は気持

ち悪いものだ」

○校舎のどこか

目の前のスマホを見て、

アリス「それ、なんで……」

○大学・講義室

ロージー「そんな。違う！ そんな変態たちと大政くんは全然違う！」

大政「違っても。人が違っても。見られること、触られること、そこに付随する気持ち。性的に搾取されたことがあるなら、好意そのものに対して気持ち悪く思うことだってある。捉え方は、受け止める側である彼女のものだ。だから、僕は世界の交わり方を、もっと慎重になるべきだった。受け止めたくなくて当然だ」

ロージー「あんた、やっぱりいい人だよ」

と、スマホの通知がふたつ鳴る。

互いに互いのポケットを指さし、自分

を指す。

スマホをポケットから出すロージと

大政。

ロージ「なんじゃこりや！」

スマホにはグループラインのトーク。

りな『だれかたすけて！』

と、写真。

○校舎の隅

河津「俺の鞆に靴跡つけたの、おまえつしよ？」

問い詰められているのは佐々木。

河津「どさくさに紛れてばれねえと思った？」

○大学・講義室

ロージのスマホ。河津に追いつめられる佐々木を遠くから撮った写真。

ロージ、自分のスマホと大政のスマホを見比べる。

大政のスマホにも同じ写真。

ロージ「ちょ、これどこ!？」

スマホの画面をピンチアウトする大政。
食い入るように見ている。

大政「第三教棟三階」

と、同時に立ち上がって部屋を飛び出す。

ロージ「どこで分かった!？」

と、追いかける。

○校舎の隅（第三教棟）

河津が見せるスマホの写真。

『濡れた頭の河津が唾然としているそば。佐々木が河津の置いていたトートバッグをさりげなく踏んでいる』

佐々木「いや、あの、その、わざとじゃ」

○大学・屋外

迷わず走る大政。

ロージ「第三教棟ってどおこおこ」

大政を追いかけるロージ。

○第三教棟

河津「わざとじゃないのはさあ、俺もじゃん？　でもさあ、君たち怒ってたじゃん？」

小刻みに震える佐々木。

○第三教棟・階段

駆け上がる大政。

ロージー「まあってえ〜」

息を切らすロージー。

○第三教棟

佐々木「でも、先は、そっち……」

河津「先に？　だったら何してもいいのかよ」

○どこか

大政「いいわけねえだろ！！」

と、何か棒状の物を振り上げる。

○第三教棟

河津「へ？」

河津に振り下ろされようとする棒状の
もの。

ひゅつと音がする。

○第三教棟・三階・男子トイレ

デッキブラシを振り下ろしている大政。
ブラシ部分が壁にぶつかり、折れて落
ちる。

大政「その汚い手、離して」

目の前には、不審者の男。アリスの口
をふさいでのしかかっている。

ブラシの柄は不審者の顔すれすれに。

大政「早く」

不審者、ぎこちない動きでアリスから
離れる。

ロージー、ぜえぜえ息をしながら到着。

ロージー「なにになになにごと」

大政「ロージーくん、警察呼んで」

ロージー「え？」

トイレの中の様子を見て、

ロージー「アリス！！」

震えて立てなくなっているアリス。

ロージー、アリスに駆け寄り抱きしめる。

アリス、震える手でロージーにしがみつき、泣き出す。

落ちているスマホに目をやる大政。

不審者「ああっ」

カメラロールにはアリスが大量に。食堂での盗撮も。

大政、ポケットからビニール袋を出し、それをつまんで袋に入れる。

不審者「でも、こんな格好してるのが」

大政、折れたデッキブラシで男の胸元を一突き。くつと眼鏡を上げて、

大政「勘違いすんなよ」

唾然とするアリス。

ロージー「わお」

トイレの外が騒がしくなる。

○病院・病室（夕）

ベッドで上体を起こしているアリス。

そばに座るロージー。

かなり離れた場所で椅子に座っている

大政。

ロージー「どっから突っ込めばいいかわかんないわよ」

大政「いえ、僕は、このあたりで」

ロージー「そもそも、なんで佐々木の写真で分かったわけ？」

大政「映ってた」

ロージー「えー？」

と、スマホを出し写真を確認。

ロージー「どこどれなに」

大政「右の奥。トイレに入ろうとしている男」

ロージー「あー、それは分かる」

大政「その足元。もうひとり、足がある」

不審者の足元、アリスの厚底靴と白い

靴下がほんの少し映っている。

ロージー「え、毎日ウォーリー探してる？」

大政「見たことあると、思ったので。あああ
っ！ 気持ち悪いこと言ってごめんなさい！」

ロージー「あのデツキブラシは」

大政「トイレに置いてあったよ」

ロージー「そこじゃねえし」

大政「剣道を、小中高と15年間」

ロージー「やばっすごっすごっやばっ」

アリス「語彙力」

大政「全然強くはないんだけど、最近、宮本
くんたちに誘われて、趣味程度には体動かし
てたから、なんとか」

アリス「宮本……武蔵？」

ロージー「あー動画回ってきてたわ。佐々木
は宮本が助けたんでしょ？」

ロージーのスマホ。グループラインに
短い動画。

× × ×

河津と佐々木の間、竹刀を入れる宮
本。

宮本「は、は、離れて、くだ、さい」

宮本、へっぴり腰。

× × ×

ロージー「助けてんのか、巻き込まれにいつてんのか分かんないわね」

アリス「その人たちは、無事だったの？」

ロージー「みたいよ」

動画に続く写真。

宮本と佐々木、変顔でアイスを食べ
ている。

大政「ホントは強いんだよ」

ロージー「信じておくわ」

大政「その、断りもなく警察を呼んでしまっ
て」

アリス、首を横に振る。

大政「状況とか聞かれることになるだろうか
ら、嫌なことを思い出さないといけない」

アリス「いいよ。話す」

大政「でもせめて、一言」

アリス「いいってば。これで、今後同じよう

なことに巻き込まれる子の被害が、ひとつでも減るなら、それでいい」

大政「そうでした。あなたはそういう方でした」

ロージー「アリス……。なんかアタシ、何も分かってなかったね、ごめん」

アリス「話しても分かってもらえないって勝手に決めつけてた。というか、自分でもうまく、このもやもやを言葉にできなかった」

ロージー「アタシがなんでも分かっているふりしちゃったから」

アリス「そうかも。もっと私のこと学んで」

ロージー「参考書はどこで売ってますかぁー！」

と、泣き出す。

アリス「うるさい」

大政、ポケットを探る。

大政「これ……」

と、差し出したのはビニール袋。

大政「違った」

アリス「てかさ」

アリス、ハンカチを手にした大政に目を向け、

アリス「この距離、何？」

大政「いや、適度に」

アリス「会話する人の距離で合ってる？」

大政「そちらの世界への、踏み込み方を、模索しております」

アリス「あー、こういうヤバイ系ファッションの世界？」

大政「いや、ひとりの人として」

アリス「それは私も分かってないよ」

大政「え？」

アリス「だって、大政くんのこと勝手に推しとかなんとか言ってる、日々尾行してたし」

大政「え」

アリス「正直、気持ち悪いよね」

大政「そんな」

アリス「大政くんはとにかくいい人で、勉強一筋で、恋愛は興味ないんだって勝手に決め

つけてた。だから矢印が向いたとたんびっくりして拒否して。自己中極まりない」

大政「僕も、想像が足りなかった」

アリス「正直に言うね。私がいつか、大政くんの気持ちに応えられるのかは分かんない」

大政「それは、自由だから」

アリス「でも、リハビリっていうか」

大政「？」

アリス「人と関わる練習は、してみたい、かも」

大政「権田さん」

アリス「それはやめて」

大政「有子、さん？」

アリス「それも！ ……アリス、でいい」

ロージー、涙を拭きながら、

ロージー「この子名前、有り無しの有に子で有子だから、それを無理やりアリスって読んでんのよ」

大政「ああ！」

アリス「なによ、次郎のくせに」

ロージー「やあん！ やめてえ、ロージー！」

大政「次郎じろうジロウジイ……ああ！」

アリス「（くすくす笑う）」

大政、改まって

大政「僕は、そもそもたくさんの人の世界を教えてもらうために大学にきたから。だから、ほんの少しずつでいい。誰かの世界と交わっていけるなら、あるとき、きちんと試験を受けた意味はある」

○（回想）試験会場

高校生の大政、震える手で受験票を何度も机に置き直している。

受験票『会場…第三教棟 三階』

○（現在）病院・病室

アリス「（小さな声で）私も」

ロージー「尊ーい！！ 好きって本来そういうものよ」

と、大政にウィンク。

大政、微笑んで頷く。

アリス、ちよつと照れて笑う。

(おわり)